

論 文

竹内正一における「国策文学」の再考 — 『哈爾濱入城』を中心に

周 秋 利

広島大学大学院文学研究科博士課程後期

Reconsideration of “Literature for National Policy” by Shochi Takeuchi :
Focusing on the “Enter the Harbin”

ZHOU Qiuli

Abstract: This study focuses on Shoichi Takeuchi’s novel “Enter the Harbin” to explore how his “National Policy Literature” is expressed through his narrative. In the book, Takeuchi continued his original writing style in portraying the people who living through the historical events. However, Takeuchi was on the one hand assimilated by the state motto “Five Races Under One Union” advocated by the government at the time, while on the other hand expressing his awareness of the difficulty in achieving harmony among multi-ethnic groups. The novel indicates an intention to awaken the national consciousness and mission of the Japanese living in Manchukuo.

Key word: National Policy, Manchurian Literature, Mental state, Hometown consciousness, Five Races Under One Union

1. はじめに

塚瀬進の『満洲の日本人』により、日露戦争以前に満洲という土地で日本人商人がいた。しかし、日露戦争が始まった後、安全確保のため、ほとんどの在満日本人は満洲から引き上げた。この時期、満洲における日本人は日本軍しかなかった。戦局の推移に伴い、渡航が解禁された後、多くの日本人が押し寄せてきた。したがって、日露戦争後、日本から中国東北への移住が始まった。¹ 昭和十四年十二月二十二日(1939年12月22日)閣議決定によって、「満洲開拓政策ハ日満兩國ノ一體的重要國策」²を基本方針となった。日本から満洲への移住が日本の「国策」となったため、満洲へ移住した日本人は

いっそう多くなった。満洲で暮らしていた日本人はこの土地で働いていたと同時に、異郷での見聞や感想などをいろいろな文芸形式で表現していた。それ故、文学作品を書いていた在満日本人作家が登場した。

在満日本人作家の発祥地は大連であり、その文学創作の主体は満鉄職員が中心であった。在満日本人作家における文学活動は様々な形式で展開された。例えば、詩誌、雑誌、新聞の文芸欄などという形式であった。尹東燦は『「満洲」文学の研究』に『作文』について、下記のように紹介した。「在満日本文学者の同人雑誌に小説が現れるようになるのは『作文』の創刊以降であった。『作文』は満鉄職員を中心に、一九三二年十月に大連で創刊された純文学雑誌であった。発行部数が最盛期二〇〇〇部を超えるなど、満洲日系文学の発展にはたした役割は大きい。同時期のほかの定期刊行物と比べて、『作文』に集まった作家たちにはリアリズム作家が多く、冷静に満洲国の現実を観察し、満洲国における社会問題、民族の対立・矛盾などを究明しようとする傾向が強かった。」³

竹内正一は『作文』の代表的な作家で、「満洲国」時代有名な著者であった。父竹内坦道は明治の末に「満洲」へ行き、『満洲新報』大連支社長を勤めた。竹内正一は1902年6月12日に大連市に生まれ、大連で小学校を卒業し、1921年3月に順天中学校を卒業し、同年早稲田大学予科に入学した。1926年、彼は早稲田大学佛蘭西文学科を卒業した後「満洲」へ行き、南満洲鉄道に入り、大連図書館に勤務し、1934年1月にハルビン満鉄図書館長となった。北鉄接収により1936年4月濱鉄路図書館主事となった。1943年2月満鉄副参事に昇格し、同年2月の関東州読書協会創立総会で連絡部長となった。1944年11月12日からの第三回大東亜文学者大会に古丁とともに満洲国代表として参加した。1945年2月満鉄を退社し満洲出版文化研究所常務理事に就任したが、8月に引き揚げた。1974年3月10日、竹内正一は亡くなった。⁴

竹内正一の作品が客観的に事実を反映しているということは学界において竹内に対する一般的な評価である。したがって、彼の作品は一般性を持っていると考える。彼は在満日本人作家におけるきわめてすぐれた作家と評価されている。例えば、岡田英樹は竹内正一が『「満洲国」を代表する作家として位置づけることに異議はなかろう。』⁵と論じた。満洲文学について検討する際、竹内正一が無視できない存在であることは明らかである。

しかし、「一九四一年七月に発足した満洲文芸家協会が、国策に沿った形で

文学者を動員し、現地考察を義務付けた」⁶ ことによって、竹内正一は創作スタイルを変えてきた。例として挙げられるのは『哈爾濱入城』である。この作品は、「満洲事変後」から関東軍のハルビンへの出兵までを描いた小説である。竹内正一は木場俊夫という普通の若者の経歴を通して、この歴史的イベントを描こうとした。彼はその事件の中に生きてきた人間を描く、三国勢力の複雑な関係と政治的歴史的な背景に迫ろうとした。そして、ハルビン陸軍特務機関長陸軍少尉柳田元三は序でこの作品が時局迎合小説であると評価した。したがって、この時期における竹内正一は、「冷静な傍観者」を身分としてという特徴を持つ作品を書いているとは言えないと思われる。

以上に述べたように、1941年に世界の反ファシズム戦争の転換期にあたって、戦中需要のため、日本は「満洲国」の文芸活動に対する統治を強化し、一連の政策を実施した。それゆえに、本来満洲における土地とそこに生きてきた人間に注目していた竹内正一も時局に迎合するため、創作スタイルも変えてきたと考えられる。即ち、その時点から竹内正一の「国策文学」の創作が始まった。本稿は『哈爾濱入城』を中心に、竹内正一の「国策文学」を考察したい。

2. 先行研究

中日の学界では、「満洲文学」に関する研究は多くて、だんだん深く掘り下げていく。しかし現在まで、在満日本人作家の竹内正一に対する専門的な研究はまだ少ない。現在まで挙げられる論文は三篇である。

岡田英樹の「竹内正一論」（2002）は竹内正一の文学作品を通して、竹内正一の文学とその軌跡を分析してまとめた。岡田英樹は竹内正一の「満洲」時代の作品を多く収集し、整理した。そして竹内文学の原型、変化、異質などを論じた。その論文の中に、『哈爾濱入城』について、岡田英樹は「竹内文学の破綻」という視点から、竹内の作家としての限界性を証明する者として書かれたといえよう⁷と評価した。

根岸一成の「『植民者二世』の『日本語』文学—竹内正一について」（1997）は竹内正一の文学が「満洲国」における「五族協和」といったイデオロギーに同化されたことと「植民者二世」の故郷意識について提示した。

中国の学界における竹内正一に対する専門的な研究は呉佩軍の「竹内正一が描いたハルビンの都市表象—『ギルマン・アパート点描』『馬家溝』を中心

に」(2018)という論文である。呉佩軍は「彼は上述した作品において、政治権力の変動に伴う資本権力の交代と都市空間の分裂状態を浮き彫りにしたと同時に、綿密な筆致で民族的・階級的差別及び被支配民族の生存状態をスケッチした。」⁸と論じた。

以上に踏まえると、竹内文学の特徴や技法などを研究したが、彼の創作スタイルを変えた後、「国策文学」の視点から竹内文学を考察する研究はまだ少ない。それ故に、本稿においては、竹内正一が時局向けの「満洲文学」として書かれた『哈爾賓入城』を中心にして、竹内正一の「国策文学」はどのように表現するかということをめぐる検討したい。

3. 『哈爾賓入城』における人間

『哈爾賓入城』という作品は竹内正一によってはじめて書かれた長編小説である。この小説は、1941年2月15日の「哈爾賓入城記念日」から、「哈爾賓日日新聞」で連載し、舞台は1941年から10年前の「満洲事変」当時のハルビンである。この竹内正一の唯一の長編小説は目次で11章が分けられているが、実際には12章がある。その中の、「三寒四温」という章は目次に含まれていない。これらの各章の脈絡をはっきり示すために、各章の内容を付録1で紹介したい。

一方、ここでは竹内正一は歴史小説として歴史的事件を描こうとしたが、短編の市井小説を書くことが得意である彼にとって、歴史的政治的背景や事件の推移などのことは詳しく説明できなかった。それゆえ、小説の中で伝えられる歴史的事件と物語の前後のつながりを求めるとは難しいと考えられる。岡田英樹はこの小説について次のように述べている。「『小道具めいた前景』とは、まさに第二章で述べた竹内文学の『原型』であり、もっとも得意とするものであった。そうした世界と、『壮大な歴史的政治的背景』を融合させることは、竹内の力の及ばぬところであった。」⁹しかし、この小説は新聞で連載したものとして、当時起こった事件に伴って、竹内正一の文学創作の考える道筋を妨害されたかもしれないと考える。したがって、「哈爾賓入城」という小説の組み立ては技法上から見れば、欠点があると思われる。それにもかかわらず、竹内正一は満洲で長年にわたって暮らしていたため、彼の作品には満洲での人間の状態が反映されていると信じている。その理由なのは竹内正一が『哈爾賓入城』のあとがきにおいて、「その事実のなかに生きて来

た人間を描くこと、これは、文學を志すものと為すべき仕事であると信じるのである」ということを書いて意思を明らかにしたからである。また、『哈爾賓入城』は日本人と白系ロシア人を中心としてプロットを展開するため、本稿は主に在満日本人と白系ロシア人の精神的な状態を考察しようとする。

3.1 在満日本人

3.1.1 退廢的な日本人

『哈爾賓入城』は竹内正一のほかの作品と違い（例えば、『友情』）、退廢的な風潮が在満日本人の生活様式に表れている描写ではなく、ある日本人の性格に表れている。『哈爾賓入城』では、このような父親が描かれている。主人公の父親木場完造は、いつも現実味のない儲け話を夢に描きながら、あちらこちらへあてもなく回り歩いて一日を送るのであった。しかし、同棲しているロシア人のターニヤから毎月三十ルーブルずつ受け取る約束をしているため、彼女の家に住むことができるのである。だが、この家はターニヤ一人の働きで生計を立てている。それゆえに、完造はいつもターニヤにひどく罵倒されている。この小説において、竹内正一は主人公の視点と心理の描写を通して、父親の意気地のない性格を描いた。例えば、「それ迄、父に向って悪罵の限りを盡してゐるターニヤと、それに何の抗辯もようしないで苦つばい、卑屈な笑ひに顔を歪めてゐる父親とに、何か理の判らない焦々した憤懣が湧いてくるのを、(略)」(『哈爾賓入城』p.48) というように。主人公の父親は日本人として、当時においてお金を稼ぐ仕事を見つけるのに優位な立場にあった。しかし、彼は借金を抱えてもハルビンで仕事をしたがらず、一日中空想してばかりいて、何事も成しえなかった。最後には借金精算のために「内地」に残してある田畑を売りに帰国している。ここでも寄生虫のように暮らしていた在満日本人が再現されている。

以上のように、竹内正一は冷静かつ客観的に在満日本人の退廢的な様子を描いた。そのような描写を通して、「満洲国」における政府筋が唱えた「優秀なる民族」という空虚さを示したのである。そのうえで、植民地体制における矛盾と人間の精神的な危機が作品に反映されるのである。

3.1.2 不安な日本人

「満洲事変」が起こった後の在満日本人の戦争に対する恐怖感と不安感は

『哈爾濱入城』において、爆弾の爆発時、そして戦争の緊迫の中で特に強調されている。

また、「満洲事変」は、在満日本人に精神上の不安感をもたらしただけではなく、生活上にも影響を与えた。例えば、小説の人物が新聞を読んでいる時、その新聞の内容を通して、事変勃発以来、休校し続けていた日本人小学校が、日本人小学生の安全を確保するために、市中に分散して假教場を設け開校したことがわかる。このように、戦争は確実に普通の人々に生活上の不便と重苦しい感覚を与えていた。

以上の通り、満洲における戦争は、「植民者」の身分を持っていた日本人に対して、彼らに精神的な不安感と恐怖感を与えたと考えられる。

3.1.3 故郷意識¹⁰

日本人が満洲に大挙して流入するのは日露戦争後のことである。1906年にポーツマス条約によって帝政ロシアから譲り受けた東清鉄道の一部（旅順—長春）とその支線、撫順炭鉱などの権益、財産を運営するため、1906年勅令によって南満洲鉄道株式会社が設立された。それに伴い、約15万人の日本人が故郷から離れて満洲へ移住してきた。柳条湖事件（1931年9月18日）から、日本人の満洲への移住スピードは速くなり、日中戦争の終わり（1945年）まで、中国における東北地方で住んでいた日本人は150万人ほどに達した。

一般的には、成人した後で満洲へ移住した日本人が在満日本人一世と呼ばれる。在満日本人一世は満洲へ移住する前に、日本語を話し、日本の文化に慣れていて、それゆえに、彼らは新しい環境に慣れにくいという特徴を持っていた。例えば、『哈爾濱入城』において、主人公の同僚の橋本は「東京支店から一月ほど前哈爾濱支店へ転勤してきたばかりで、まだ充分土地の事情にも地理にも暗かつた」とされる。橋本は早々来たため、ロシア人のホテルに下宿していた。しかし、彼は「ホテル住ひはどうも僕の性に合はないやうでしたね」と感じ、三間か四間くらいの庭付の家に住みたがっていた。在満日本人一世であった橋本にとって、住み慣れた故郷から新しい環境に適應する過程において、庭付の日本らしい家は「異郷」に暮らす彼を安心させるものであった。「五十に近い男の、家族に離れての獨身生活の味氣なさがその頭髪に白髪を交へた端麗な、瘦身のどこかに侘しさを覚えさせた」といったように描かれている橋本は、一部の在満日本人の象徴であると考えられる。在満

日本人一世は故郷を離れて、「異郷」で暮らす孤独感に直面していたのである。また、竹内正一はハルビンの街の描写を通して、橋本の「異国」という意識を表している。

橋本氏は通りに立つと、邊りを眺め廻しながら呟いた。まだ僅かに明るさを残した西の方の浅葱色の空を、斜紋街の大きな建物が點々と割つて、灯の少ないその方は見透しも利かない。それだけに土地に不馴れな橋本氏には、なにかこの各國人の雜居する大都市の奥深くに、底知れない不気味さが漂つてゐるやうな氣がして、思はず吐いた言葉だつた。然し反對のキタイスカヤの方は、煌々と赤い電燈の灯が輝き、街路のざわめきが絶え間なく潮騒のやうに響いてくる。橋本は、このふしぎな明暗の妖しい交錯のなかに、いま思ひがけない新しさで、激しく異国を感じるのだつた。(『哈爾賓入城』p.155)

以上の描写は、橋本の「異国」に対する激しい違和感と、強くなる故郷への思いを反映している。そして、ロシア様式の店へ行つたとき、「たつた一組の日本人は、如何にも異人種の感を彌が上にも感じないではゐられなかつた」(『哈爾賓入城』p.171)と橋本が感じる場面がある。在滿日本人一世にとって、「異郷」の文化に馴染むことは難しいことが証明できるだろう。

はじめて滿洲へ移住する日本人にとって、故郷への思いはよくあることであった。しかし、滿洲に生まれて育つた在滿日本人二世にとって、「故郷」に対する意識はぼやけたものになっていた。即ち、在滿日本人二世には第一の故郷も第二の故郷も、そもそも故郷という意味が分からなかつたのである。彼らは故郷の意識を失っていた。竹内正一は在滿日本人二世の一員として、自分の故郷に対する意識に作品を通して伝えた。例えば、『哈爾賓入城』の主人公の木場俊夫は、「幼少の頃から哈爾賓に育つて、ロシア語を話すことは、正確な日本語を話すことよりも、遙かに樂なくらゐだつた」(『哈爾賓入城』p.44)としている。未成年の時に家族と一緒に滿洲に移住した日本人は在滿日本人二世と呼ばれる。彼らは年齢が若いため、新しい環境に適応しやすかつた。それゆえに、滿洲における風俗や言語などの文化を習得しやすかつたと言える。俊夫が日本人にもかかわらず、日本語よりロシア語の方がうまく操ることができたということが理解できるだろう。一方でそれは同時に、俊夫が母国の文化をよく知らないことを反映している。俊夫ははじめて奈緒の話を聞いた時、次のようなことを感じている。「澄んだ奈緒の聲に、日本語のう

つくしさを始めて知ったかのやうに、茫然と耳の奥で聞いてみた」(『哈爾賓入城』p.166)。俊夫は母国へ帰ったことがなかつたため、女性の日本人と会話をする機会が少なかった。「異郷」で母国語を学んだ彼には、日本語の美しさを感じるができなかつたのである。先に挙げたような描写から、俊夫が故郷の日本をよく知らないということがわかる。そのため、俊夫は日本に対する好奇心を持っていた。しかし、小説において彼の故郷に対する懐かしさの描写はまったくなかつた。即ち、日本は彼にとって、ただ遠いところに存在する一国であつたのである。むしろハルビン生まれて育つた俊夫はこの土地に対する愛情を表している。「哈爾賓—哈爾賓—俊夫は口のうちにいま自分の住んでゐるこの大都會の名前を、繰り返して呟いた。この名前こそは彼にとつて、他のどの土地よりも懐かしく、美しく、尊く、そして決してわすれることの出来ないところのものではなかつたか—」(『哈爾賓入城』p.57)。竹内正一は「他のどの土地よりも」という言葉を使って、主人公の故郷ではないハルビンに対する彼の愛情を強調している。故郷への懐かしさよりもハルビンへの愛情が強いことから、在満日本人二世は「故郷」に対する意識がぼやけていたことが証明されるだろう。

前述を踏まえると、在満日本人二世であつた竹内正一は作品によって「故郷」に対する意識を伝えていると言えるだろう。当時において、在満日本人一世の故郷への思いにしても、在満日本人二世のぼやける故郷意識にしても、ロシア人の流離する意識にしても、当時の戦争と移住は彼らに精神的な苦しみをもたらすものであつたと考えられる。

3.2 在満白系ロシア人

3.2.1 流離の民族の苦難

北満地帯におけるロシア人は18世紀以前から南下し東漸してきていた。1917年、帝政ロシアは倒れ、レーニンらボリシェビキの率いる革命政権が誕生し、「ソヴィエト社会主義共和国連邦」が成立した。この時多くの貴族たち、軍人たち、ロシア正教の宗教者たちが国外へ逃げた。1918年から数年間に、極東コースを選んだ難民が、ハルビンをはじめ鉄道沿線の町に流入した。こうした人々が、一般的に白系ロシア人と呼ばれるようになった。竹内正一が書かれたもう一つの短編小説『流離』の主人公は、「南に、北に彼等の一族は流れ流れて一生を終わる宿命を持つてゐるのだ。」ということを感じて

いる。即ち、この民族は「流離」の一族と言える。

『哈爾賓入城』では、悪辣なロシア婦人のターニヤが描かれた。ターニヤは小さなキャバレーで働いていた。彼女は同棲している後妻として、主人公の木場俊夫と父親の完造と一緒に生活していた。この一家はターニヤの少ない給料で生活を維持していた。ターニヤはいつも「妾がみなけりやとつくに餓死してゐるところなんだよ。それを有難いとも思やあがらずに、親子して毎日ほつつき歩いてばかりゐて、その上に、お前さんたら何だい、人が每晚働きに出るのを好いことにして、ワーリヤの尻ばかり追ひ廻して…」(『哈爾賓入城』p.47)のような不平を言っていた。俊夫はこのようなことに耐えられず、ターニヤと喧嘩して家出しまった。ターニヤはいつも完造の無能を侮辱し、俊夫の親不孝を罵るのであった。竹内正一はそのような悪辣なロシア婦人を描く、「太い大根のやうな人差し指」、「白粉だらけの顔」、「一升瓶のやうな腕」などの外見描写を通して、俊夫のターニヤに対する最大の憎悪を表す。小説の前半において、ターニヤという人物の描写は読者に悪いイメージを与える。しかし、そのような婦人にも不幸な人生があった。小説の後半において、ターニヤの次のような境遇が描かれる。即ち、ターニヤの夫は早世しており、自分の息子のフェージャはキタイスカヤの騒ぎの後で急に行方不明になってしまう。完造もターニヤを捨てて日本へ帰ってしまうのである。竹内正一は小説における前半と後半の人物像を対比させ、違いをはっきりさせることを通して、満洲におけるロシア婦人の無力感と不幸をさらに際立たせるのである。

3.2.2 日本人との関係

『哈爾賓入城』では、セリョージャを代表とする白系ロシア人らが描かれた。小説においては、俊夫とそのロシアの少年たちの間の、友情に関する描写が多い。例えば、セリョージャは俊夫を誘ってロシア人たちが催す小さな夜会に参加していた。その夜会は時節を問わずハルビンに住むロシア人の若者たちにとっては楽しいものの一つであった。そのような個人的な夜会に俊夫が誘われたことは、俊夫がいつの間にかずると、その不良者にも似たロシアの少年たちの仲間の一人のように取り扱われていたということを証明できるだろう。

そして、『哈爾賓入城』では、次のようなことが描かれている。俊夫の友達

のロシア人が、もしハルビンでも日本と中国の戦争が起こったら、日本のために手伝いという態度を明らかにする。その理由は小説の中に詳しく説明される。即ち、彼は一方では、「セリョージャがさう言つてたよ—今度の戦争が始めてから、支那人は急にボルシェビキのおべつかを使ひ始めて、俺達エミグラントを虐めようとしてるんだつて…」(『哈爾賓入城』p.142)とし、他方では、「日本の兵隊は強いんだものな。早く支那兵をやつつけて、それからボルシェビキもやつつけて呉れれば好いんだ…」(『哈爾賓入城』p.142)とするのである。つまり、満洲における白系ロシア人は自分の力を失ったとき以来、いつの日か日本の助けを受けて、遠い昔のツァーリの国を再現して欲しいと願っていたのである。

また、竹内正一は主人公とは関係ない事件の描写を通して、ロシア人と日本人の良い関係を描いている。例えば、危険地帯となった所に住んでいた日本人の老夫婦は避難をせず、近所の親切なロシア人の家に隠れていた。こうした描写からは、当時における普通の日本人とロシア人の間は、ほぼ矛盾や衝突などはなかったと考えられる。以上に挙げた例は個人的な友情であったと言えるが、それ以外にも、ロシア人が日本軍と接触することもあった。例えば、セリョージャは田川中尉のために、ひそかにハルビンの街の情報を探った。以上に踏まえると、この時代における日本人と白系ロシア人の関係は親密であったと言える。

4. 時局向けの満洲文学—「国策文学」

4.1 「五族協和」下の「現実性」

「満洲国」は五つの民族で構成された。「五族」とは、漢人、満人、モンゴル人、朝鮮人、日本人を指す。実際にはこのほかにもハルビンのロシア人とほかの東北地方の少数民族の人々なども存在していた。ただし、五族に白系ロシア人が含まれなかったことである。

「五族協和」というスローガンは本来中国で清朝末年から唱えられたような民族協和論であった。辛亥革命に際して、孫文は中華民国の統合を目指し、漢族、満洲族、モンゴル族、回族、チベット族の五族共和の建国理念を主張した。多民族の国家として、各民族が平等の立場で共存共栄することを唱えた。注目すべきは、孫文による「共和」は共和制（共和国）のイメージを表していることである。しかし、「満洲国」における「五族協和」の「協和」は

本来の意味を根本的に改めた。「共和」を「協和」に変えたことによって、その裏面の意図も全く違うものになったと考えられる。「五族協和」は、漢、満、日、モンゴル、朝鮮の五つの民族が協力して平和な国造りをするという建国時の理念であった。実際には、日本が本来中国東北における民族に属していない日本人を「五族」に組み入れ、そのうえで、自分の民族をほかの各民族の人々を統治する地位に置いた。このような背景の下で文学界もこのような意識を作品の中に入れたことは疑いえないだろう。

それでは、竹内正一によって書かれた五族・民族協和社会の実態はどのような様子であっただろうか。

『哈爾濱入城』では、主人公俊夫が貸家の札を見た時、同僚の橋本に頼まれたことを覚え、家の内部を見ようとした場面を描いた。この場面において、まず、日本人ではない老婆の人物像を描き出す時、「不愛想な顔」や「ぶつきら棒に」などの言葉を使って、愛想が悪い老婆の姿を浮き彫りにする。『哈爾濱入城』では、この一つの例だけではなく、竹内正一は日本人以外の者、即ち中国人と一部の白系ロシア人の人物像を浮き彫りにする時、おとしめる言葉をよく使っていた。それゆえに、竹内正一は作者として、五族の地位が不平等であり、即ち自分が日本人としての民族優越感という潜在的な意識を持っていた。したがって、彼は知らず知らずのうちに、底辺に生活する中国人や白系ロシア人に対する差別的な眼差しで見るということを作品の中に表れると考えられる。次に、老婆は日本人の主人公俊夫を見ると、すぐ不仲になった。そして、借り手が日本人であることがわかると急に値を上げたというなどのことは「猶太人の家主や貸間主などにはよくある事」が暴露されることには、それに対して風刺する意味があると考えられる。こうした描写は実際に満洲において多民族の間の関係は協和できないものがわかる。

以上に踏まえると、多民族の間の関係を描いた時、竹内正一は自分の「真实性」の創作スタイルを保ったまま小説を書いたが、彼の潜在的な意識の中にはそのような普通の人間に対する避けがたい同情心がある。他人を同情に扱うことは、他人に平等の地位に置くことはないと考えられるので、竹内正一はある種差別的な眼差しで文学作品が創作していたことが明らかになった。したがって、竹内正一は「自分の民族をほかの各民族の人々を統治する地位に置いた」という「五族協和」の意図に影響され、「五族協和」というイデオロギーに同化したに違いないだろう。

4.2 「国策文学」の表現

従来竹内正一の小説の中に歴史的・政治的な物語に関連する文字は少ない。しかし、『哈爾濱入城』の序章は当時の哈爾濱陸軍特務機関長陸軍少将の柳田元三によって書かれた。その上、彼は「その意味に於て本篇の作者が、幸ひ一満洲國民として哈爾濱の現地に住み、事變中三千の日本人が、全く孤立無援無防備の哈爾濱市内に籠城し、只管皇軍の急援を待ち望んで當時に取材しこの一篇を為したることは、在満作家として洵に好適な題材を得たものと言へよう」¹¹と評価した。したがって、『哈爾濱入城』は「満洲国」における「国策文学」といっても間違いはない。

では、従来現実主義文学の手法で小説を創作した竹内正一は政治統治の強化に伴って、「国策文学」の創作表現はどのような変化があるか。

まず、竹内正一の作品の中にはとりわけ日本人を美化するところがあった。例えば、『哈爾濱入城』では、危険地帯になった双城堡に駐在していた満鉄ハルビン事務所の大豆混合検査員は、列車でハルビンに引き揚げた後、キャバレーで飲んでいる四人の検査員一人は危険を顧みず職場へ帰りたいと言う。すると、もう一人も一緒に帰ると言い出したという場面を描く。例として挙げた場面で竹内正一は強い責任感を持つ日本人の人物像を描いている。なぜ竹内正一は小説の中にそのように表現したか。「満洲国」の民族指導方針に応じたからこそである。例えば、「満洲国の住民に対して1938年に実施された調査の報告書でも『各民族は、民族協和の国是に基づき、(中略)最強最優秀民族たる日本人の指導下に、今や渾然融合せる新大陸文化の創造に向かって邁進』すると述べられている。」¹²『哈爾濱入城』の全篇を見ると、作者はとりわけ日本人を美化して、「最優秀民族たる日本人」という理念を強調することが確かにあったと考えられる。また、彼は主人公の心理描写に力点を置いて描き、賛美の気持ちを表している。

次に、戦争に関する場面の描写を通して、日本人の愛国心と敵方への敵意を増す。例えば、小説において、清水大尉が犠牲になる場面を想像する主人公の心理描写を次のように描いた。

俊夫は堅く閉じた眼の奥に、凍てついた氷の曠野に、ただ一人愛機愛國第×号を背にして、群つてくる支那兵を睥睨しながら、旋回機關銃の銃把をしつかり握りしめて最後の一發まで奮戦してゐる清水大尉の倅を、墨繪のやうに描いてゐた。(『哈爾濱入城』p.358)

ここでの描写には、作者の感情が含められていると考えられる。このような描写は、読者がその場に身を置いているような感じを与え、いっそう日本人と中国人の敵対意識を強化する。竹内正一は小説の中で、敵対意識を次のように書いた。「大尉を襲った敵に對する抑へ難い憎惡と憤怒に息をつまらせながら口を開かうとした」（『哈爾賓入城』p.359）。作品においては、人物の行動や戦争の激しさに力点を置いて描かれるほかの部分もあり、そのような描写を通して、普通の人間の士気を高め、戦争意識を引き起こした。また、この作品において、竹内正一の戦争に対する批判はなかった。それに対し、竹内正一の以前の小説の内容については、戦争を回避し、底辺の人間に注目し、自分の同情の気持ちを作品の中に入れていた。なぜ竹内正一の考えが大きく変わったのか。それは時局に迎合したからであった。

前述のとおり、日中戦争が起こったため、「満洲国」の時局は大きく変わった。竹内正一の「国策文学」の『哈爾賓入城』において、当時の政府筋が唱えた「五族協和」というスローガンに応じたため、日本をほかの各民族の人々を統治する地位に置ける優秀性を強調する。また、作品を通して、竹内正一は戦争への意識を表し、文学を通して読者の気持ちを煽り、在満日本人の敵対意識と戦争への意識をいっそう高まらせた。

5. 終わりに

竹内正一における「国策文学」の『哈爾賓入城』において、歴史小説としてまだ技法上の欠点があるが、その歴史的な事件の中に生きてきた人間の描写は竹内正一従来の創作スタイルが続いていたと考える。というのは、『哈爾賓入城』は「国策文学」としても、竹内正一が同時代のある作家たちと違い、わざと調和のとれた雰囲気を作り出さなかった。それゆえに、『哈爾賓入城』において、満洲における人間を探られる。

まず、満洲における人間の精神的状態について、十九世紀末フランス・デカダンス文学の影響の下、竹内正一は在満日本人間の退廃的な社会現象を描いていたこと。それには、植民地体制における矛盾と人間の精神的な危機が反映されている。戦争は「植民者」という身分を持っていた日本人にも、精神的な不安感と恐怖感を与えていたことが示される。また、竹内正一の多くの作品は底辺の白系ロシア人に着目し、彼らの苦難を描いている。戦争の勃発に伴い、満洲における白系ロシア人は、日本の助力とかつてのツアーリの

国を再現という幻想を抱くようになった。この時期に白系ロシア人と日本人との関係は親密だったと言える。次に、故郷意識について、在満日本人一世は故郷を離れ、孤独感に直面していたということ。在満日本人一世は「異郷」の文化に馴染むことは難しかった。それに対し、満洲に生まれて育った日本人二世にとっては、日本という故郷に対する意識はぼやけたものであった。彼らは逆に、満洲の土地に対して深い愛情を注いでいた。戦争と移住は移住者に精神的な苦しみをもたらしたと言えるだろう。

一方、「国策文学」としての『哈爾賓入城』を論じたい。『哈爾賓入城』で描かれた生活シーンを見ると、当時政府が唱えた「五族協和」というスローガンに反し、実際には多民族の間の協和を実現することは難しかったと考えられる。一方、竹内正一の潜在的な意識の中に各民族の地位は平等ではなかったからこそ、彼はそのような普通の人間に対する同情心を作品に表していた。即ち、竹内正一は既に自分の民族—日本が「満洲国」の統治地位を置いたという考えを持ち、作品を創作した。したがって、竹内正一の「国策文学」はある種差別的な眼差しを文学作品に表していたことが明らかになった。竹内正一が「五族協和」といったイデオロギーに同化したことは間違いないだろう。「真実性と普遍性を持っている」と評価される竹内正一の作品であるが、その「真実性」はただ人々の生活のシーンで実像が描かれていたことのみにあつてはまるに過ぎないと考えられる。「五族協和」を唱えた「満洲国」において、絶対的な「真実性」はなかったと私は考える。

また、1941年という世界の反ファシズム戦争の転換期にあたって、戦中需要のため、竹内文学は国策文学へ転向した後の表現について、『哈爾賓入城』においてはとりわけ日本人を美化し、「最強最優秀民族たる日本人」という理念が強調されているところが多かった。そして、その作品は読者の戦争への意識を高め、在満日系人の「日本人」としての民族意識と使命を目覚めさせるという意図を持っていたと考えられること。作品には戦争に対する批判的な意識はなかった。つまり、竹内正一が時局を迎合するために、以上のような表現方法あるいは創作技法を小説の中に入れていたと考える。

本稿は、竹内正一の唯一の長編小説を選定し、竹内正一の「国策文学」を再考した。しかし、一篇の作品はすべての竹内正一の「国策文学」を代表することができないため、竹内文学に対する考察はまだ不十分である。一方、竹内正一が帰国した（引き揚げ）後の現存の作品の収集も不十分である。竹

内正一の文学作品には、「満洲文学」に関する研究に値する部分の余地があり、それに関しては、研究が続けられていく必要があると考える。

注

- ¹ 塚瀬進『満洲の日本人』（吉川弘文館，2004），10-13
- ² 『満洲開拓政策関係法規』（大東亜省満洲事務局，1943），1
- ³ 尹東燦『「満洲」文学の研究』（明石書店，2012），38
- ⁴ 竹内正一の紹介のご参考は以下の究成果報告書による
岡村敬二研究代表者『戦前期「外地」で活動した図書館員に関する総合的研究』科学研究費補助金（基盤研究C）研究成果報告書，平成21年度－平成23年度）京都ノートルダム女子大学人間文化学部，2012.3，p.134
- ⁵ 岡田英樹「竹内正一論」『立命館文学』（立命館大学人文学会，2002），582
- ⁶ 岡田英樹「竹内正一論」『立命館文学』（立命館大学人文学会，2002），588
- ⁷ 岡田英樹「竹内正一論」『立命館文学』（立命館大学人文学会，2002），595
- ⁸ 呉佩軍「竹内正一が描いたハルビンの都市表象—『ギルマン・アパート点描』『馬家溝』を中心に」『跨境日本語文学研究06』（笠間書院，2018），93
- ⁹ 岡田英樹「竹内正一論」『立命館文学』（立命館大学人文学会，2002），595
- ¹⁰ 本節のタイトルは「故郷意識」という言葉を使っては、先行研究を踏まえ、小泉京美の研究によって引用するからである。小泉京美の論文によると（『満洲』における故郷喪失—秋原勝二『夜の話』—2012 p.79）、『故郷』という概念は、個人に固有の生育地から、共用体験または共同体意識によって構成される『心の故郷』なるものまで、位相の異なる意味内容を包含している。」
- ¹¹ 竹内正一 1942『哈爾濱入城』赤塚書房 国立国会図書館デジタルコレクション 最終アクセス2018年5月9日 <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1135505/3>
- ¹² 祝利 2014「満洲国」における「民族協和」下の人材養成と日本語教育 九州大学学術情報リポジトリ p.24

引用参考文献

引用文献

- ・竹内正一 1942『哈爾濱入城』赤塚書房 国立国会図書館デジタルコレクション 最終アクセス2018年5月9日 <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1135505/3>

著作

- ・宮川善造 1940『人口統計よりみたる満洲國の縁族複合状態』建國大學研究院刊
- ・『満洲開拓政策関係法規』1943 大東亜省満洲事務局
- ・麻田平草 1966『ハルビンの回想』恵雅堂
- ・姜念東等 1980『偽満洲国史』吉林人民出版社

- ・『満洲文藝年鑑』 1993 第一輯～第三輯／別冊 昭和十二年版 昭和十三年版 康德六年版 葦書房
- ・沈潔 1996 『『満洲国』社会事業史』ミネルヴァ書房
- ・日本社会文学会（編） 1997『近代日本と「偽満洲国」』不二出版
- ・川村湊 1998 『文学から見る「満洲」「五族協和」の夢と現実』吉川弘文館
- ・岡田英樹 2000 『文学に見る『満洲国』の位相』研文出版（山本書店出版部）
- ・ハインリッヒ・シュネー（金森誠也訳） 2002 『『満洲国』見聞記』講談社
- ・塚瀬進 2004 『満洲の日本人』吉川弘文館
- ・島田俊彦 2005 『関東軍 在満陸軍の独走』講談社
- ・植民地文化学会 中国東北淪陥 14 年史総編 2008 『『満洲国』とは何だったのか』小学館
- ・山本有造 2007 『『満洲』記憶と歴史』京都大学学術出版会 太洋社
- ・砂村哲也 2009 『ハルビン教会の庭』図書印刷
- ・『中国近現代年表』 2009 最終アクセス 2018 年 11 月 17 日 <http://www.inaco.co.jp/isaac/shiryo/china/nenpyo.htm>
- ・葉山英之 2011 『『満洲文学論』断章』三交社
- ・小峰和夫 2011 『満洲 マンチュリアの起源・殖民・覇権』講談社
- ・尹東燦 2012 『『満洲』文学の研究』明石書店
- ・岡村敬二研究代表者 2012 『戦前期「外地」で活動した図書館員に関する総合的研究』科学研究費補助金（基盤研究 C）研究成果報告書，平成 21 年度 - 平成 23 年度）京都ノートルダム女子大学人間文化学部
- ・单援朝 2016 《『漂洋过海的日本文学』社会科学文献出版社

論文

- ・根岸一成 1997 「植民者二世」の「日本語」文学—竹内正一について『近代日本と「偽満洲国」』不二出版 pp.361-365
- ・塚瀬進 2001 「日露戦争前における日本人の流動性」『長野大学紀要』22(4) pp. 138-148
- ・岡田英樹 2002 「竹内正一論」『立命館文学』立命館大学人文学会 第五七三号 pp.581-600
- ・西田禎元 2002 「満洲における日本文学の状況」『創大アジア研究』創価大学アジア研究所 pp.17-26
- ・祝然 2008 《『満洲文学』に表したオリエンタリズムについて》北京師範大学大学院
- ・李琳 2008 《『偽満時期日満文人笔下的満洲形象』山西大学
- ・小泉京美 2012 『『満洲』における故郷喪失—秋原勝二『夜の話』— 『日本文化文学』 pp.79-90

- ・小泉京美 2014 「特集・占領と開拓の〈記憶〉故郷喪失の季節 満洲郷土化運動と金丸精哉〈満洲歳時記〉の錯時性」『フェンスレス』オンライン版 占領開拓期文化研究会 第2号 pp.5-22
- ・刘洋尚侠 2014 《关于伪満洲国研究的几个问题》《社会科学战线》pp.260-262
- ・祝利 2014 「『満洲国』における『民族協和』下の人材養成と日本語教育」九州大学学術情報リポジトリ
- ・刘超 2015 《日本左翼知识分子在伪“満洲国”的反殖民文化实践:以“作文派”为例》《史林》pp.129-221
- ・細谷亨 2016 「満蒙開拓団と現地住民—日本人移民入植地における「民族協和」の位相—」『立命館経済学』64(6)pp.208-227
- ・ヤキメンコ レギーナ 2016 「1920-1940年代の満洲におけるロシア人と日本人の『満洲経験』に関する思い出—1920-1940年代の満洲において居住したロシア人と日本人の回想記の比較研究—」2016年度博士学位申請論文 大阪大学大学院言語文化研究科
- ・ドミートリエヴァ・エレナ 2018 「満洲国における白系ロシア人の位置づけ—東洋人と西洋人の共存共栄・民族協和の社会の実態—」『岡山大学経済学会雑誌』49(3)pp.79-108
- ・呉佩軍 2018 「竹内正一が描いたハルビンの都市表象—『ギルマン・アパート点描』『馬家溝』を中心に』『跨境日本語文学研究 06』東アジアと同時代日本語文学フォーラム編 笠間書院 pp.83-95

付録1 『哈爾濱入城』のシラバス

第1章は「凍る朝」というタイトルである。この章の内容は次の通りである。ハルビンに住む日本人青年木場俊夫（トーチヤ）がいつの間にかずるずると、不良者に似たロシアの少年たちの仲間の一人として扱われるようになる。一方、彼の父親の木場完造は借金精算のために「内地」に帰ろうとしている。俊夫が駅へ父を見送りに行く途中で三年前のことを思い出す。大連で学校に通っていた俊夫は突然父によって、学費が続かないことを告げられ、ハルビンに呼び返されることになったのである。父と一緒にハルビンの家へ帰った後、父と同居していたロシア人の後妻ターニヤに会った。現実に戻り、俊夫は駅で出会った田川中尉から父が食堂にいることを知る。食堂でターニヤも見送りに来ていた。俊夫はターニヤが自分を罵倒することを避けるため、父と一緒に先にホームへ行く。列車の中で父親は自分の息子のことを田川中尉に頼んで、日本に帰っていく。

第2章は「風騒ぐ」というタイトルである。この章は俊夫が大連からハルビンに帰った後の思い出である。ターニヤはキャバレーで働いていた。父は現実味のない儲け話しを無想にしていた。俊夫は何時の間にか、街で心安くなったロシア人の少年たちの仲間に入って行くのであった。ターニヤにとって、父親の完造は大事な愛人であり、息子の俊夫の方はただ穀つぶしの居候でしかなかった。そして、ターニヤはいつも自分の息子フェージャを褒めて、同時に俊夫を罵っていた。ある日、父親がターニヤからの侮辱を受けた。俊夫は父の意気地ない性格とターニヤからの侮辱に耐えられなかったため、ターニヤと喧嘩した後に家出しまった。思い出から現在に戻り、駅で田川中尉は俊夫に別れを言って、そしてハルビンが現在置かれている立場を俊夫に教える。俊夫はハルビンが一体どんな風が変わって行くのであろうかと、この北満の大会の運命を考えるのであった。

第3章は「風曇」というタイトルである。この章ではまず歴史的イベントの「満洲事変」の状況が説明される。歴史的イベントとつながる登場人物がちょうど田川中尉である。思いつくにはセリョージャは田川中尉の命令で情報収集をしていた。この間に国際情勢は不安定であったため、田川中尉はハルビンでの日本人の安全を心配していた。実際にハルビンで四ヶ所に爆弾が投げ込まれる事件が起こる。この事件を受けて、ハルビンの日本人は南満の安全地帯へ引き揚げるものが現れ始める。一方でハルビンに在留する日本人の不安はいつそう強まっていく。ある日、日本の飛行機から白いビラがまき散らされる。俊夫はロシア人仲間の中で唯一日本語が分かる人間だったので、通訳としてロシア人仲間に内容を伝えた。そのビラの目的はロシア人を安心させ、ロシア人に中立の立場から戦争に参加しないように呼びかけるものであった。爆弾の騒ぎはさらに二ヶ所で続けて起こった。人畜に損傷はなかったが、人々の心は緊張のなかに追い込まれる。五、六人のロシア人の集団が住民を嘲笑あるいは威嚇するかのよう大声で歌いながら通り過ぎるのであった。

第4章は「巷座」というタイトルである。この章は主に木場俊夫の職場でのことや同僚たちの人間関係などが描かれる。俊夫は家出した後、日系銀行の語学屋使い走りとなる。主任の橋本は東京支店から一か月ほど前にハルビン支店へ転勤してきたばかりである。俊夫はハルビンの事情をよく知っているため、橋本が部屋を探すのを助ける。仕事が終わった後、俊夫は二人の同僚（坂田と山村）と一緒にご飯へ行く。そこで、街でセリョージャに出会って、俊夫はロシア人の小さな夜会に誘われる。食事中

俊夫はターニヤの息子フェージャを久し振り見る。俊夫は彼の行動を疑問に思ったので、この店で働いている知り合いのロシア人カテリーナに彼のことをたずねる。しかし、彼女はフェージャについて詳しくは語らなかつた。また同僚たちと飲んだり、楽しくダンスを興じたり、ロシア人女給に惚れたり惚れられたりすることもある。

第5章は「黒い影」というタイトルである。俊夫は二人の同僚と別れて、街でセリョージャの弟ミーシャを待つ。ミーシャと会った後、二人は自動車で夜会が行われている場所へ行く。しかし、路上に倒れていたセリョージャに気づき、俊夫はすぐセリョージャを病院に起こり込む。その一方で、ロシア人の間で夜会は愉快に行われている。その中で、突然ミーシャからセリョージャが血だらけになって倒れていたことを聞いて、全員が驚き、みんなで病院へ行つて、セリョージャを見舞う。セリョージャは意識がなかったが、明日の朝になったら気が付くだろうと聞いて仲間たちは安心する。セリョージャの友人アリョーシャをはじめとする仲間たちは誰かセリョージャに傷を負わせたのか知ろうとする。俊夫は少し心当たりがあつたが、勝手に判断することができず、みんなに言い出せないでいた。翌日セリョージャは気が付く。俊夫はセリョージャの話から犯人が自分の思っていた通りであつたことを知る。しかし、これにはターニヤの息子フェージャがかかわっているため、俊夫は仲間に真実を言えないままであつた。セリョージャに傷を負わせた人たちはちょうど店で見たフェージャと彼の仲間であつた。俊夫にはそれが度々ある不良青年らの単なる勢力争いや一時的の感情の衝突などではないことと感じられたのであつた。

第6章は「庭のある家」というタイトルである。不穏な満洲において、俊夫のロシア人友達アリョーシャは若しハルビンで戦争が起きたら、日本の方を手伝いたいと打ち明かす。一方で、橋本のからは彼の家族が急に來ることが伝えられる。俊夫はちょうど見つけていた貸間を橋本に紹介する。この貸間に橋本が満足したため、銀行の職員たちに手伝われながら家族と一緒にその家に引っ越しする。そこで、俊夫は橋本の令嬢奈緒に惚れたり惚れられたりする。

第7章は「路上不安」というタイトルである。本章はまず戦争の緊張の状況や馬賊のことや世界的な情勢などが描かれる。ハルビンもうすぐ新しい年を迎えようとしていた。奈緒は俊夫を誘い、一緒にショッピングしに出かける。ショッピングする途中で、キタイスカヤの通りの中国人経営の食料品店和盛利の入口で喧嘩が行われていることに気づく。俊夫は野次馬の中に紛れ込む。すると、二、三の中国人の店員にアリョーシャは店が引きずり込まれようとしていた。俊夫は自分の力でアリョーシャを救うことができないため、セリョージャに助けを求める。

第8章は「血に狂う」というタイトルである。アリョーシャの消息を失つた翌日に、俊夫はセリョージャと会う。アリョーシャの件に対して、ロシア人の仲間たちの怒りは抑えきれずにいた。セリョージャはアリョーシャの行方不明にフェージャが何か関係していると思つていた。なぜならば、セリョージャの傷はフェージャの仲間たちにやられたものであつたからである。セリョージャはフェージャを捕まえることを俊夫に頼む。しかし、セリョージャとの約束を忘れたわけではなかつたが、俊夫は銀行の職員たちと一緒に元日を過ぎて、酔いつぶれてしまう。そして、翌日の朝に目を覚ますと、激しく自責しながら、急いで宴会が行われた山田の家を飛び出す。すると、思いかけず彼はフェージャの姿を見つける。その後、アリョーシャが殺されたことがうわさされ、ロシア人の仲間は店の前に集まって騒ぎを起こす。そこに、ロシア人は

フェージャの仲間たちが現れ、セリョージャたちの感情を煽っていく。さらに、中国人の警察が秩序を維持するために現れ、ロシアのエミгранトが中国人の警察に衝突して暴動が発生する。この暴動を見て、俊夫はセリョージャが警察に検束されることに気づき、彼を救おうとしたが、田川中尉に呼び止められてしまう。田川中尉は日本人として、こういうような暴動に巻き込まれてはいけないと言う。田川中尉は俊夫にこの暴動の中の利害関係を教えるのであった。

第9章は「嵐の前」というタイトルである。北満の時局は愈々新しい進展を始めている。ハルビンには再び新しい不安が迫っているようである。ハルビンの情勢は一層危なくなっていた。そこで、田川中尉と同僚らは在留四千の日本人の安全を確保するため、対策を相談する。彼らは引き揚げが最後の手段と考え、まずは五ヶ所に日本人を收容することに決定する。その結果南部戦前の双城堡に難民が殺到する。あまつさえ敗残兵の襲来が伝えられて城内には不穏の気が張っている。同地に駐在していた満鉄ハルビン事務所の大豆混合保管検査員四名は列車でハルビンに引き揚げの止むなきに至った。四人は久しぶりのキャバレーへ行くのであった。

第10章は「邂逅」というタイトルである。ハルビンに引き揚げてキャバレーで飲んでいる四人の検査員一人は危険を顧みず職場へ帰りたいと言う。すると、もう一人も一緒に帰ると言い出した。その時、俊夫はちょうど隣の卓子で飲んでた。彼はその二人の会話から二人に対する尊敬の気持ちを持っていた。一方、ターニヤはこのキャバレーで働いていた。彼女はまた俊夫と彼の父親を侮辱した。俊夫は、俊夫の同僚たちもいたため、羞恥と焦慮に溢れていた。俊夫はターニヤから父を取り戻さなければならぬと決心する。彼は父と二人きりの新しい生活が展開されることを期待するのであった。

第11章は「三寒四温」というタイトルである。ハルビンの銀行出張所は近くの新聞社が包囲されているため、危険な状態になっていた。出張所の職員は危険な地帯を抜け出して、ほかの職員に情勢を告げる。田川中尉は事態が悪化して中国兵がなだれ込んでくるのを防ぐため、ハルビンにおける義勇隊員を招集する。俊夫とほかの同僚らも義勇隊員の一員として、在留日本人を保護することになった。俊夫は避難民の食糧を購入するため、バザールへ行くことになったが、同僚の山田と橋本の家族に言付けを頼まれる。このため、俊夫は橋本の家に行くのであったが、橋本の家族は同僚の山村と一緒に外へ出かけたことを知る。むだ足であった俊夫は不愉快を感じる。

第12章は「その前夜」というタイトルである。銀行の職員たちの家族も收容所に避難してくる。防衛本部からの電話による戦況報告は避難所の隅々にまで伝えられる。みんな落着を失っている。ある日、日本の偵察機の編隊が埠頭区の上空に現れる。その一台はチンヘイの方に不時着らしいので、俊夫たちは救援隊として出でて行く。俊夫たちは不時着の場所で田川中尉と飛行将校の清水大尉、偵察将校の福井中尉に会う。他の人たちは状況の報告と食物の買い出しのために離れるが、清水大尉の一人が不時着の所に残って飛行機を修理するのであった。しかし、清水大尉が殺されてしまう。みんなの自責の念や「敵」に対する恨みや清水大尉に対する尊敬の気持ちなどが、在満日系人の「日本人」としての民族意識と使命を目覚めさせる。清水大尉の遺骸收容のため、決死隊を出す。決死隊を見送る後、俊夫は奈緒と出会う。そこに、ハルビンにおける日本人はずっと関東軍がハルビンに出兵することを待っている。ついに関東軍ハルビン出兵のニュースが伝えられ、在満日本人の気持ちを高揚する。同時に俊

夫は父が戻ってくることを聞き、極まって泣き出してしまったのであった。

付録2 竹内正一の年表

西 暦	和暦	年齢	歴史背景	事 件
1902年 6月12日	明治35年		1902年 1月シベリア鉄道全面開通； 1903年 7月東清鉄道全面開通； 1904年 2月、日露戦争勃発	旧満洲・大連に生まれ (本籍は神奈川県高座郡寒川村)
			1906年南満洲鉄道成立	
			1917年ロシア革命	
1921年	大正10年	19	1921年清朝滅亡 1922年ソビエト連邦成立 1923年関東大震災	3月順天中学を卒業； 4月早稲田大学予科入学
1926年	大正15年	24		早大文学部佛蘭西文学卒業； 10月大連図書館に勤務(司書)
			1931年 9月、満洲事変勃発 1932年 3月 1日「満洲国」成立、9月清朝廢帝溥儀執政に就任	大連図書館員時代、職場仲間とともに同人雑誌『線』を発行、その後その後身になる『作文』の同人に加わり創作活動をつづける； また、図書館に寄託された大谷光瑞のアジア大陸探検関連の資料(大谷文庫)を整理している
1934年 1月	昭和 9年	32		ハルビン満鉄図書館長に転勤
5月			1934年 3月、「満洲国」は帝制を實行し、溥儀を皇帝とし、国号を「満洲帝国」に変え、年号を「康德」とする	脱稿：「世界地図を借りる男」(『作文』 1934年5月)
11月				脱稿：「ある女」(『作文』 1934年11月)
1935年 3月	昭和10年	33	北満鐵路譲渡	中東鐵路中央図書館(のち哈爾濱図書館本館となる)を引き続く
5月			日本拓務省は15年のうちに満洲へ10万戸50万人という「満洲へ農業移民の根本方策」を制定	脱稿：「土地」(『作文』 1935年5月)
12月				脱稿：「懐疑家」(『新天地』 1936年2月)

西 暦	和暦	年齢	歴史背景	事 件
1936年 1月	昭和11年	34		脱稿：「友情」（『作文』 1936年1月） 4月濱鉄路図書館主事
1937年 4月	昭和12年	35		ハルビン鉄路図書館主事となる
9月			1937年7月7日に盧溝橋事件を発端として「支那事変」が始まる	脱稿：「流離」（『作文』 二十七輯 1937年11月）
1938年 2月	昭和13年	36		脱稿：「ギルマンアパート点描」（『作文』 三〇輯 1938年3月）
4月				脱稿：「裸木」（『作文』 三二輯 1938年7月）
10月				脱稿：「寒暖」（『作文』 三四輯 1938年11月）
12月20日				第一小説集『氷花』（限定30 作文叢書 作文発行所）を刊行
1939年 2月	昭和14年	37		「しびるすきゑ・べるみに」（『満洲行政』六一二 1939年2月）を出版、 「白眠堂径租」（『満洲浪漫』 二号 1939年2月）
5月15日				館報『北窓』を刊行
9月			第二次世界大戦勃発	「馬家溝」（『新潮』 三六一九 1939年9月）
1940年 6月	昭和15年	38		「復活祭」（『新潮』 三七一六 1940年6月）を出版、「孤児」（『早稲田文学』 七一六 1940年6月）
8月				「故郷」（『満洲新聞』）という作品を書き、「日本と満洲との、いづれにも故郷を持ち、いづれにも故郷を感じる時、吾々はそのいづれの土に還るべきだろうか」という問題を立つ
12月				哈爾濱図書館主事の肩書きで奉天図書館に来館
1942年 5月 5日	昭和17年	40	1941年7月に発足した満洲文芸家協会が、国策に沿った形で文学者を動員し、現地視察を義務づける。 1941年12月8日、真珠湾攻撃によって、太平洋戦争が始まる。	短編小説集『復活祭』（満鉄社員会叢書第五輯 満鉄社員会）を出版
9月				「風俗国課街」（『新潮』 三九一九 1942年9月1日）を出版

西 暦	和 暦	年 齢	歴 史 背 景	事 件
11月10日				長編小説『哈爾濱入城』（東京赤塚書房）を出版
11月30日				脱稿：「向日葵」（『北窓』四一六 1942年12月）
1943年11月	昭和18年	41		2月の関東州読書協会創立総会で連絡部長； 「早春」（『満洲公論』1943年11月）を出版
1944年3月25日	昭和19年	42		館報『北窓』を停刊； 哈爾濱図書館時代、『北窓』を刊行した以外、発表した小説は四〇篇あまりにのぼるが、日本国内発行の『新潮』、『早稲田文学』に掲載されたのが八篇ある
8月				短編小説集『向日葵』（新京近沢書房）を出版
11月			南京で開かれた第三回大東亜文学者大会	古丁とともに「満洲国」代表として参加
12月				『明日の山河』（満洲時代社）を出版
1945年2月1日	昭和20年	43		満鉄を退社し満洲出版文化研究所の常務理事に就任
8月			1945年8月、広島・長崎原爆投下； 日本敗戦、「満洲国」滅亡	引き揚げ後も執筆活動を続ける
1949年9月	昭和24年	47	中華人民共和国成立	満洲文芸春秋にいた香西昇の経営する日比谷出版社入社
1951年6月	昭和26年	49		機構改革のため退社
7月				千葉県 <small>の</small> 小型自動車競争会総務課長
1952年6月	昭和27年	50		退社； 日本赤十字社中央病院図書室に勤務
1963年11月	昭和38年	61		同日本赤十字社中央幹部看護婦研究所講師（兼務）
1967年	昭和42年	65		中央病院を退職、日本赤十字社女子短期大学事務長となる
1972年	昭和47年	70		退職
	毎春			竹内宅で竹の子会を開催する
1974年3月10日	昭和49	72		亡くなる

（『満洲文芸年鑑』第一輯、『20世紀日本人名事典』、「竹内正一論」、『戦前期「外地」で活動した図書館員に関する総合的研究』、『中国近現代史年表』による制作）